
(3) 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科泌尿器科学分野
教授 榎田 英樹

令和4年1月から12月における鹿児島県内16定点からの性感染症4疾患の患者報告数は、(1)性器クラミジア感染症650人、(2)性器ヘルペスウイルス感染症99人、(3)尖圭コンジローマ100人、(4)淋菌感染症331人であった。報告数の合計は1,180人であり、令和2年の報告数835人から345人(41.3%)増加し、令和3年の報告数974人からは206人(21.1%)増加した。4疾患全てにおいて報告数が増加しており、特に性器ヘルペスウイルス感染症は昨年比で25.3%増であり、5年ぶりに増加した。淋菌感染症は昨年比21.7%、性器クラミジア感染症も昨年比21.0%と増加した。また尖圭コンジローマは昨年比で16.3%増であった。

(1)性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎、骨盤腹膜炎などを発症する。令和4年の患者数は、令和3年の537人から113人(21.0%)増加し650人であった。月別の報告数は令和2年、令和3年と比較すると4月を除く全ての月で報告数が増加していた。累積定点当たりの報告数は全国平均の1.3倍で推移した。年齢層別の比率をみると、7年連続で20～24歳(28.0%)、25～29歳、30～34歳の順に多く、これらの3年齢層で全体の約61.7%を占めている。また15～19歳における患者数は42人で前年比10人増であった。15歳～29歳の性器クラミジア感染症患者367人は4性感染症全体の31.1%を占め、同年代での男女比は1.6:1で男性の比率が高かった。保健所別報告数では、川薩、鹿児島市、始良の順に多く、全体の約82.8%を占めた。

(2)性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus: HSV, HSV 1型又は2型)の感染により発症する。令和4年は99人が報告され、令和3年の79人から20人(25.3%)増加した。全体の男女比はほぼ同率であった。年齢層では20～44歳の患者が64人と全体の64.6%を占めていた。月別の報告数は4月が最も多く、5～8月で減少する傾向がみられた。累積定点当たりの報告数は全国平均の0.7倍で推移した。保健所別報告数では、鹿児島市が45人と最も多く、全体の45.5%を占めた。

(3)尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス: HPV)の感染により、性器周辺に生じる有症状腫瘍である。令和4年の患者数は100人であり、令和3年の86人より14人(16.3%)増加した。男女比は5.7:1と圧倒的に男性で多く見られた。年齢層では20～44歳の患者が58人と全体の58.0%を占めていた。月別の報告数は、定点あたり0.5人前後で変動は少なかった。累積定点当たりの報告数は全国平均の0.9倍であり、ほぼ同じレベルで推移した。保健所別報告数では鹿児島市、始良の順に多く、併せて全体の89.0%を占めた。

(4)淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* による性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎や骨盤腹膜炎を発症する。令和4年の淋菌感染症の患者数は331人であり、令和3年の272人から59人(21.7%)と増加した。月別の報告数をみると以前みられていた夏季に限って多い傾向は認められず、10月、11月、12月がそれぞれ35人と最も報告数が多かった。また令和2年、令和3年と比較して4月と5月を除くすべての月で報告数が増加していた。累積定点当たりの報告数も多く、全国平均の2.0倍で推移した。保健所別報告数では、始良、鹿

児島市，川薩の順に多く全体の 89.2%を占め，特に始良からの報告は全体の 48.6%と突出していた。年齢層別には 15 歳～29 歳の年齢層が全体の 56.5%を占めた。男女比は 4.3 : 1 と圧倒的に男性で多く見られた。

令和 4 年の性感染症発生動向の特徴は，4 性感染症においてそれぞれの報告数が全て令和 3 年と比較して増加したことが挙げられる。4 性感染症すべてにおいて 20 歳～29 歳の比率が 30 歳～39 歳の比率と比べて高かったこと，4 性感染症の一つ尖圭コンジローマにおいては前年と同様に女性の比率が 15.0%と性感染症 4 疾患の中では最も低かったことであった。また，全ての性感染症において 15 歳未満における患者発生比率がゼロであり，15～19 歳においても感染数が前年比で横ばいあるいは減少傾向であったことは好ましい結果といえる。また前年に引き続き，性器クラミジア感染症は川薩保健所，淋菌感染症においては始良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比

平成 11 年から令和 4 年の 4 性感染症全体の 1 定点あたり報告数の年次推移を見ると，令和 4 年は 73.8 であった。令和 3 年は 60.9 であったので 21.2%の増加となり，過去 2 年上昇傾向にあるので今後の推移を注視したい（図 1）。全体の男女比は 2.8 : 1 と男性の比率は近年の統計では最も高くなった。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ 1.6 : 1，4.3 : 1 であった（図 2）。平成 27 年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが，6 年連続で男性患者数が女性患者数を上回り，男性の比率が年々上昇している。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり，本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。



図1 4性感染症の年次別定点当たりの報告数

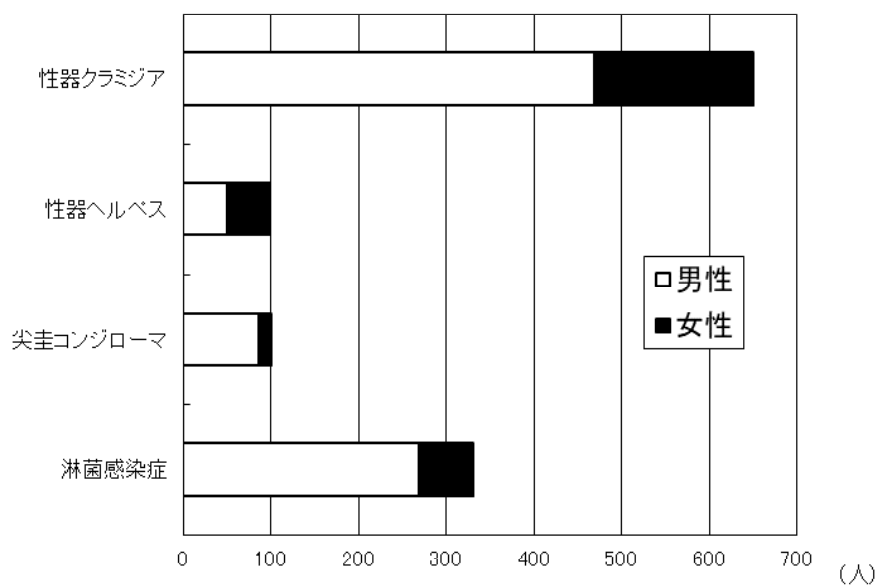


図2 令和4年の性感染症の疾患別男女別報告数(鹿児島県)

22)性器クラミジア感染症

(定義) *Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和4年の性器クラミジア感染症の報告数は650人(累積定点当たり報告数40.64)で、令和3年(537人)より113人多かった。平成30年(467人)、令和元年(443人)、令和2年(453人)と推移した。月別報告数では、6月、7月(それぞれ70人)が最も多く、前年よりも更に高値で推移した(図2-22-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.3倍で推移した(図2-22-2)。年齢別では、20～24歳(28.0%)、25～29歳(22.0%)、30～34歳(11.7%)の順に多かった(図2-22-3)。

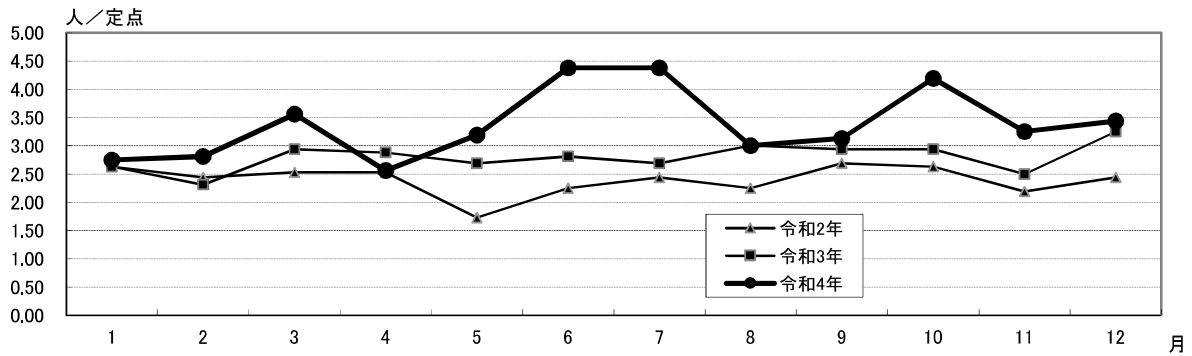


図2-22-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

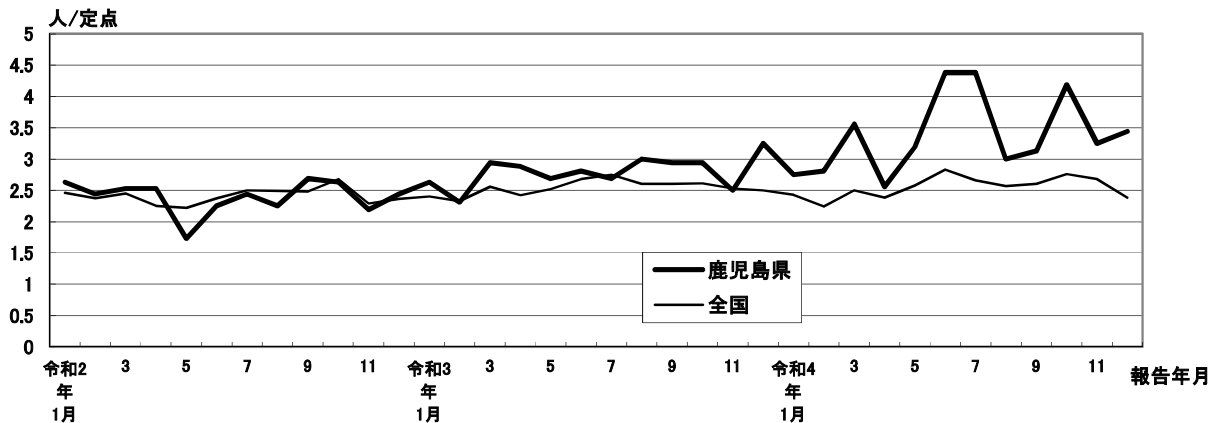


図2-22-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

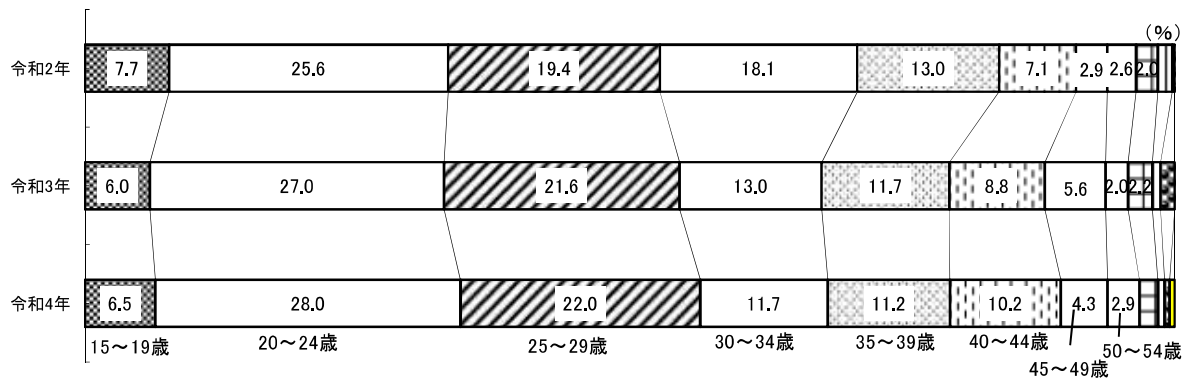


図2-22-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

23)性器ヘルペスウイルス感染症

(定義) 単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型)が感染し、性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和4年の性器ヘルペスウイルス感染症の報告数は99人(累積定点当たり報告数6.19)で、令和3年(79人)より20人多かった。月別報告数では、4月(12人)が最も多かった(図2-23-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約70%で推移した(図2-23-2)。年齢別では、25～29歳(19.2%)、20～24歳(16.2%)、30～34歳、35～39歳、45～49歳(それぞれ12.1%)の順に多かった(図2-23-3)。

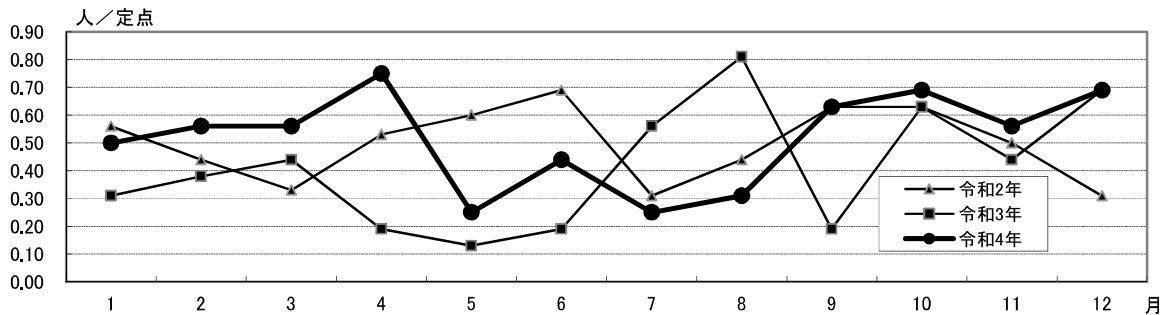


図2-23-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

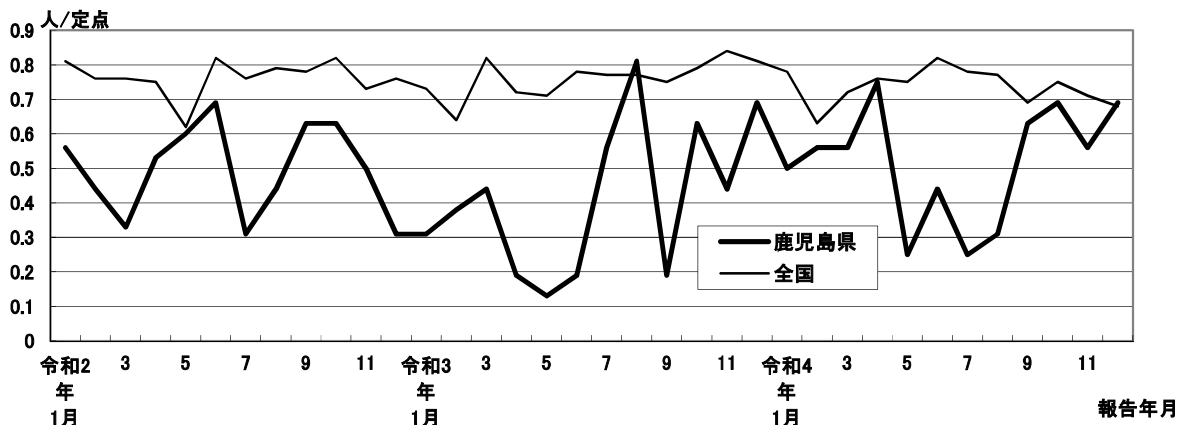


図2-23-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

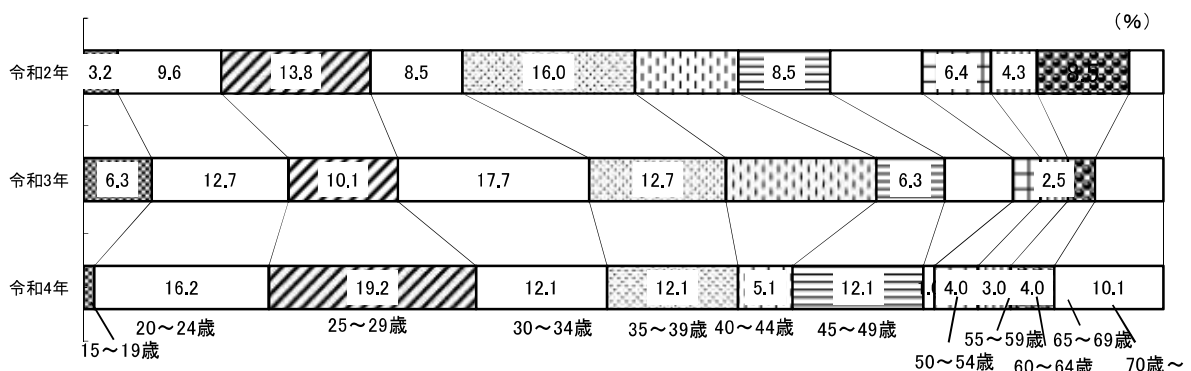


図2-23-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

24)尖圭コンジローマ

(定義) 尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス, HPV)の感染により、性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは、80種以上が知られているが、尖圭コンジローマの原因となるのは、主にHPV6型とHPV11型であり、時にHPV16型の感染でも生じる。

令和4年の尖圭コンジローマの報告数は100人(累積定点当たり報告数6.27)で、令和3年(86人)より14人多かった。平成30年(63人)、令和元年(86人)、令和2年(94人)と推移した。月別報告数では、9月(14人)が最も多かった(図2-24-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約0.9倍とほぼ同レベルで推移した(図2-24-2)。年齢別では、25～29歳、30～34歳(それぞれ18.0%)、35～39歳(14.0%)、20～24歳(13.0%)の順に多かった(図2-24-3)。

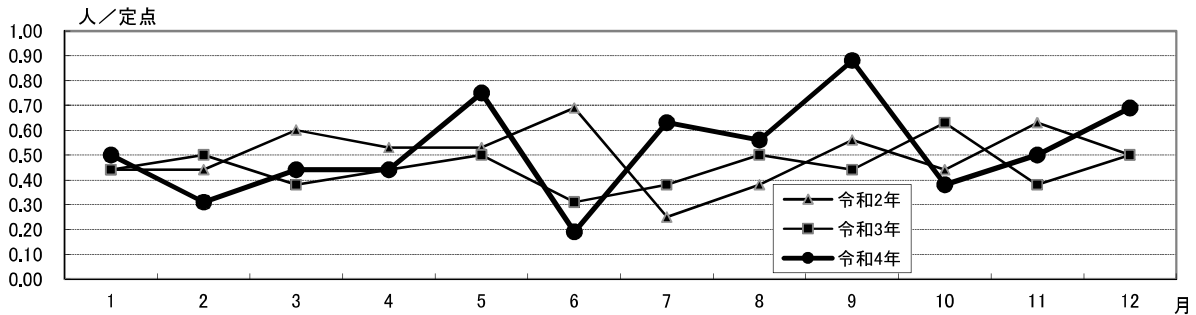


図2-24-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

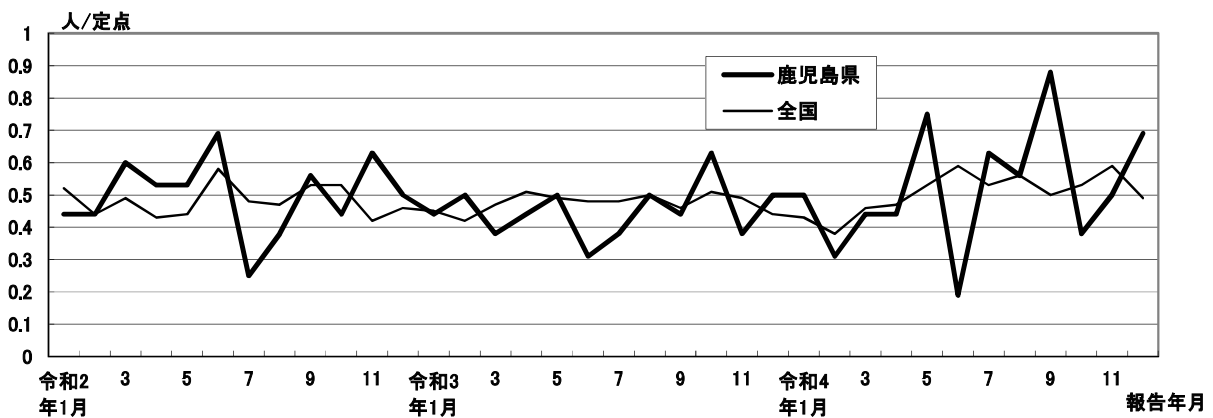


図2-24-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

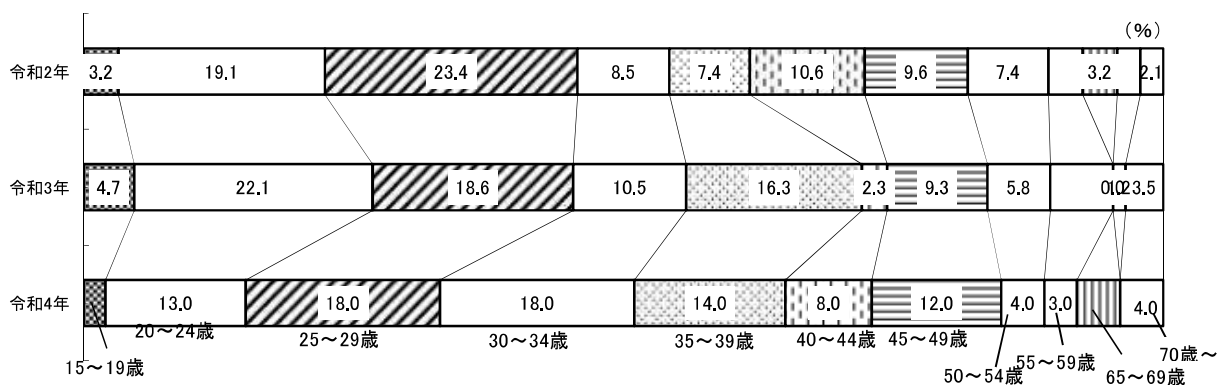


図2-24-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

25)淋菌感染症

(定義) 淋菌(*Neisseria gonorrhoeae*)による性感染症である。

令和4年の淋菌感染症の報告数は331人(累積定点当たり報告数20.71)で、令和3年(272人)より59人多かった。平成29年(273人)、平成30年(235人)、令和元年(222人)、令和2年(194人)、令和3年(272人)と推移した。月別報告数では、10月、11月、12月(それぞれ35人)が多く(図2-25-1)、累積定点当たり報告数を見ると本県は全国の約2倍で推移した(図2-25-2)。年齢別では、20～24歳(25.4%)、25～29歳(24.8%)、30～34歳(12.7%)の順に多かった(図2-25-3)。

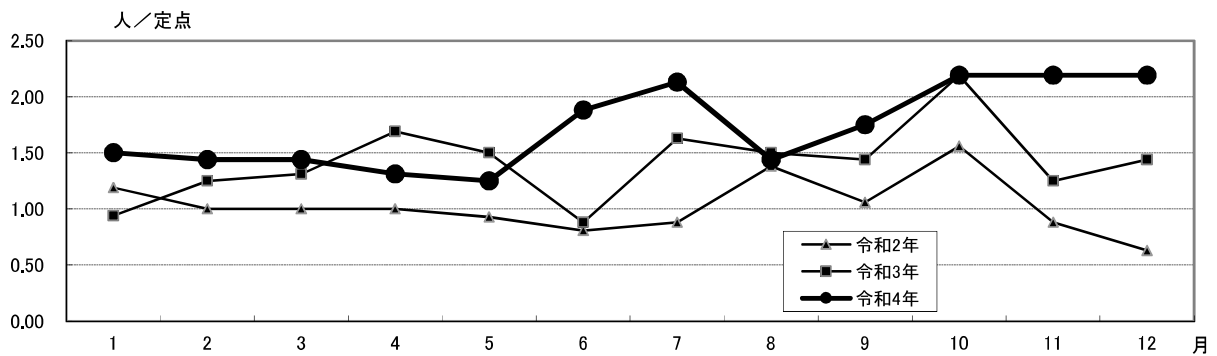


図2-25-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

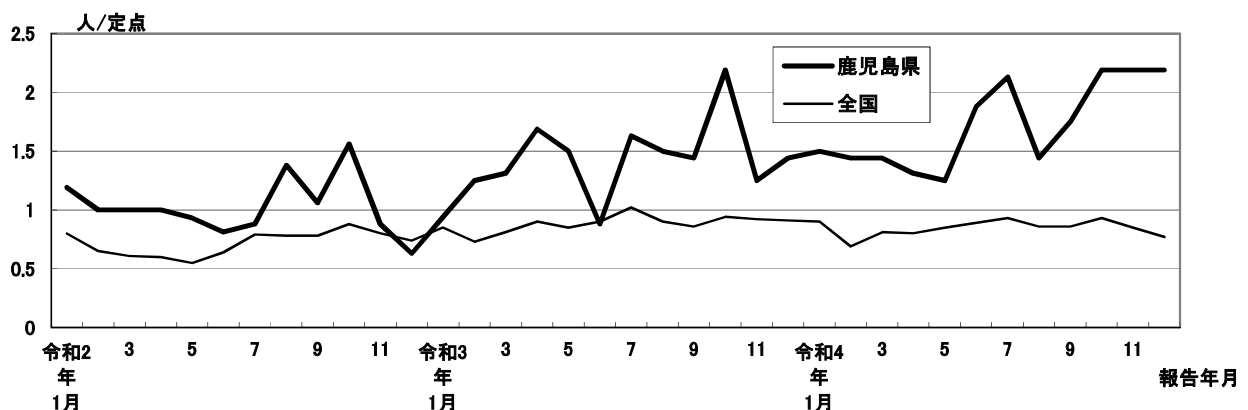


図2-25-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

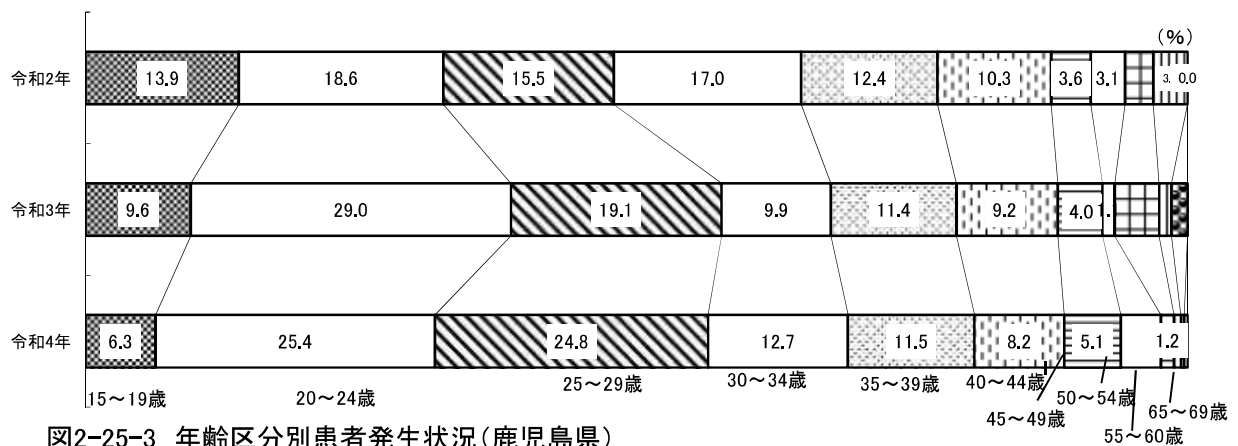


図2-25-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)